

女子青年における幼少期の家族機能が摂食障害傾向に及ぼす影響

The influence of childhood family function on eating disorder tendency of female adolescent.

臨床心理学研究科 臨床心理学専攻

1000-100711 諏訪 希美

指導教員：小澤 真教授

1. 問題と目的

近年、我が国では青年期女子の低体重(痩せ)の者の比率が高まっている(矢澤・金築・根建,2009)。成長過程である青年期において、過度の痩せ願望からダイエットをし、適正体重を維持できなくなった場合、身体的に悪影響を及ぼす可能性がある。その上、体重を減らそうとするあまり、危険な薬品や食品摂取で重篤な健康被害が発生する恐れや、あまりにも強い体重や体型へのこだわりが摂食障害につながる危険性もある。また、摂食障害の診断基準は満たさなくとも、極端な節食や過食などの異常な食行動が長期にわたって続けられると、身体的および心理的発達にさまざまな悪影響を及ぼすことが報告されている(小野・嶋田,2005)。

厚生労働省は、肥満とやせの状況について、BMI(Body Mass Index)=体重(kg)÷身長²(m)の算出の値により、国民健康・栄養調査を実施した(厚生労働省,2007)。その結果、男性は、全ての年齢階級において、肥満者の割合が20年前(昭和62年)、10年前(平成9年)と比べて増加傾向であることが報告された。一方、女性は、30～60歳代において肥満者の割合が20年前、10年前と比べて減少していた。また、20～40歳代においては低体重(痩せ)が増加傾向にあると報告された。このように最近の国民栄養調査の結果から、特に青年期女子は、実際に「やせ」の傾向にあると同時に、意識の面でも「やせ志向」が高まっていることが窺える。

体重・体型へのこだわりに影響を及ぼすものとして親の養育行動や家族機能の要因が考えられる。摂食障害傾向は、家族機能に影響されて発症することもあり、瘦身願望やダイエット志向が高まっている現代において、賞賛獲得欲求・拒否回避欲求、また、身体満足度や自尊感情が引き金となって摂食障害を発症する可能性が考えられる。そこで、本研究では、女子青年を対象に、幼少期の家族機能が摂食障害傾向に及ぼす影響について、賞賛獲得欲求・拒否回避欲求、自尊感情、身体満足度の観点から検討することを目的とした。臨床像の特徴から導き出された摂食障害傾向は、摂食障害の連続線上にあり、そこで明らかにされた知見は摂食障害を理解する上で役立つものと考えられる。

2. 方法

1.調査の概要

2011 年 9 月下旬から 10 月下旬にかけて、私立大学・大学院生に通う女子 298 名を対象に、無記名式の質問紙調査を行った。

2.質問紙の構成

(1)家族機能測定尺度

Olson,D.H.(1985)が開発した FACES III (Family Adaptability and Cohesion Evaluation ScalesⅢ)を草田・岡堂(1993)が和訳して作成し、現在の家族機能を測定する尺度する「家族機能測定尺度」を使用した。“凝集性”“適応性”のそれぞれ 10 項目ずつ、5 件法で構成された尺度である。

(2)賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度

承認欲求の程度を測定する尺度で、小島・太田・菅原(2003)によって作成された。賞賛獲得欲求とは、他者の注目を集め賞賛や肯定的な評価を獲得しようとする傾向であり、拒否回避欲求とは、自己を隠し、他者からの否定的な評価を回避しようとする傾向である。“賞賛獲得欲求”“拒否回避欲求”のそれぞれ 9 項目ずつ、5 件法で構成された尺度である。

(3)自尊感情尺度

Rosenberg(1965)が開発した Self-Esteem Scale を山本・松井・山成(1982)が邦訳した 10 項目である。5 件法で構成された尺度である。

(4)EAT-26 (Eating Attitude Test-26)

ダイエット、食事・過食へのこだわりや、食事のコントロールなど神経性食欲不振症に特徴的な摂食態度や食行動について測定する尺度である。全 26 項目からなり、6 件法で構成された尺度である。

(5)身体満足度尺度

自己の身体に対する満足度を測定する尺度で、伊藤(2001)によって作成された。全 4 項目からなり、5 件法で構成された尺度である。

(6)ダイエット経験有無・BMI

ダイエットの経験の有無について回答を求めた。また、調査対象者の身長と体重を記入してもらい、BMI を算出した。

3. 結果と考察

本研究では、幼少期の家族機能が摂食障害傾向と関連があるかを調べるために、相関係数を算出したところ、無相関であったため、仮説 1～3 は全て棄却された。つまり、バランス群の人は EAT-26 が低くなり、凝集性高群－適応性高群および凝集性低群－適応性低群の人は EAT-26 が高くなるという U 字型は採択されなかった。U 字型ではなく、直線的なモデルを想定し、パス解析を行った結果、モデルの適合度が低かったため、採択されなかった。そこで、一要因分散分析を行った結果、家族機能においてバランスを保っている女子青年において、身体満足度が高くなることが本研究で明らかとなった。

奥田(2007)は、摂食障害病理群の家族関係は、雰囲気において暖かさやぬくもりに欠け、柔軟性や安心感と乏しさなどが特徴であると指摘しているが、本調査では対象者が比較的健常者であったことから、家族と問題が生じたとしても臨機応変に対応ができる力があることや、比較的仲良く暮らせていることが窺える。今後は女子大学生・大学院生に絞らずに、対象者を増やし検討することが望まれる。